



おわりに



浪江のこころプロジェクトプロジェクトリーダー
高崎経済大学地域政策学部教授

櫻井 常 矢

私は、「浪江のこころ通信」震災後3年間の記録」（平成26年3月発行）の巻末において「これからが『浪江のこころ通信』の役割が問われる段階」と申し上げました。「時間の経過とともに町民の生き方や方向性が見えていく中で、町民の絆をいかにしてつなぐのか」と。そして本年3月には浪江町の一部避難指示解除がありました。このことは、それまで福島県内外のいずれに住んでも全ての町民にあった「浪江町に戻りたくても戻れない」という共通項がはずれ、町に「戻る者」と「戻らない（戻れない）者」という捉え方を導くことにもなります。一部避難指示解除は、町の復興が前に進むことを意味すると同時に、町民の一人一人の心情や相互の関係をより複雑なものへと変えていくことは否定できません。『通信』が果たそうとする町民の絆をつなぐという取組みは、更に難しい段階へと進んでいくと考えています。

さて、本プロジェクトを今後も進めていくにあたり確認しておきたいことが3点あります。その第一は、

世代間の継承についてです。『通信』はこれまで、町民が被災前の浪江町の思い出や被災体験を語ることで、できることを前提に取材を進めてきました。しかし、例えば現在の浪江町の成人式では、中学生時代をこの町で過ごした最後の学年となつてきています。浪江町で過ごした時間よりも町外で過ごした時間が長くなる中で、成人式の意味も少しずつ変化し、浪江町を思い出として語ることでできる若者たちも減っていくことが危惧されます。持続可能なまちをつくるためには、世代間のつながりが重要です。こうした若者たちに向けて、あるいは若者たちの声を活かしてこれからの『通信』をどのように発信していくべきなのかを考えていかなければなりません。

第二は、それぞれの町民の思いに寄り添う『通信』づくりにあらためて邁進していくということです。『通信』は、大震災の復旧、復興をめぐる状況など、数字などで表現できる事実だけではなく、その名のとおり人々の“こころ”を伝えることを大切にしてきました。生活再建をめぐるプロセスでは、様々な戸惑い、苦しみ、喜びがあり、そうした心境の変化を大切にしたい。「思いの記録」こそが『通信』の意義と思っています。一部避難指示解除によって、より複雑さを増すはずの町民相互の関係を意識し、町に戻って頑張ろうとする人たち、あるいは浪江町に戻りたくても戻れない人たちなど、それぞれの思いに立ちながら丁寧な『通信』づくりに取り組んでいかなければなりません。

そして第三は、浪江町行政との協働についてです。本プロジェクトがここまで続けてきた背景には、取材協力者を中心とした民間の力と役場との協働関係があったと振り返ります。とりわけ大震災直後の混乱の中でこうした取組みがスタートし、大きなトラブルも無く丁寧な歩みが継続したのは、民間と行政との関係以上に、震災復興に真剣に向き合う人間としての感性と相互の信頼関係があったからにほかなりません。こうした協働型復興のシンボルとしての『通信』は、これからも浪江町行政との協働体制を大切にしながら真摯に町民の心に向き合っていきます。引き続き皆様のご理解とご協力をお願いいたします。